

直前東大古文特講



【二】 出典：鴨長明『発心集』〈貧男、差図を好む事〉／オリジナル問題

現代語訳

近頃のことであつたらうか、年をとつていて、ひどく貧しくなるとしがつたい男がいた。（以前は、）官位などを持っている人であつたのだが、（今となつてはしかるべき職場に）出仕するよるべもない。それでもやはり古風な心の持ち主で、（なりふりかまわずに生きる道を探すという）みつともない振るまいなどは思いもよらない。（かといつて、）世俗的なものへの執着心がないわけでもないのも、また、髪を剃つて出家しようと思う気持ちもなかった。ふだんはきまつた住居もなくて、古い堂で荒れはてたところに泊まつていた。

なすこともなく年月をおくりながら、（暇つぶしに）普段やつていることといつては、人に使い古しの紙などを乞うて集め、たくさん設計図を書いては、理想的な家のたたずまいを空想をするばかりであつた。寢殿はこうこう、門は何式のものにしようなど、そんなことをあれこれと考えながら、（次から次へと）尽きることはない空想に、心を慰めて過ごしていたので、その様子を見聞きする人は、たいへん（ばかげた）ことの例として（このことを）言っていた。

ほんとうに、実現するはずのないことを計画するのは、空しいことであるけれど、よくよく考えてみれば、この世の楽しみの中では、心を慰めるにこしたことはない。一、二町の敷地いっぱい建てた（広大な）邸宅でも、こういうものをすばらしいと思うのが習性になつてゐる世間一般の目はともかくとして、実際には、自分が寝起きする場所は、一、二間にすぎないのだ。その他は皆、親しい人ばかりか、あまり親しくない人が住むためであるとか、あるいは、（本来は）野山に住むのが当然である牛や馬のための家までも作つておくのではないか。

このようにつまらないことに身を疲れさせ、心を苦しめて、百年も千年も保存できるようにと、材木を選び、檜皮や瓦を、玉や鏡のように磨きたてたところで、何の意味があるだろうか（『むだなことなのだ』）。（その家の）主人の命ははかないものであるから、住むといつてもそう長いことではない。（間もなく、）あるいは他人の住家となつたり、あるいはまた風でこわれたり、雨で朽ちてしまつたりする。まして、ひとたび火事が出てしまつたときなどは、長い間かけて造り上げたものが、わずかの間に煙となつてしまふではないか。ところが、かの男の空想上の家は、走り回つて（材木を）求めたり、磨きあげるようなめんどもない。雨風にこわれ朽ちること

もないし、火災で焼失する心配もない。描くところはたった一枚の紙きれにすぎないが、空想をして楽しむだけならそれで十分なのである。

解答

(一) アⅡやはり古風な考え方の持ち主で、賤しい仕事をするなどとは考えもつかなかった。

イⅡ剃髪出家して僧になろうという考えもなかった。

ウⅡ何枚も見取り図を描いて、家を作る空想をする。

(二) 役に立たない無駄なことの例。

(三) 豪華な家を作ってみても、実際に住む人間の過ごす時間も使う空間も限られているから。

(四) 男が住みたい家は結局心の中にあるだけで、求めるのも管理するのも大変な実際の家ではないということ。

解説

(一) アについて。「さすがに」は「そうは言っても、それでもやはり、何といってもやはり」という意の副詞。「古めかし」は「今めかし(現代風)」に対する語で「古風である、時代遅れで古くさい」という意の形容詞。「あやしき振舞ひ」については、「振舞ひ」の部分で傍線部直前にある「出で仕ふるたつき(しかるべき職場に出仕する手段)」との関係で「生きるための行動→仕事」ぐらいの意味で捉えられれば、「あやし」も「怪し」ではなく「賤し」の意味でとれるだろう。解答では「賤しい仕事をする」としたが、「なりふりかまわず生きる道を探す」(→職業を選ばない)という訳でも十分許容解である。

イのポイントは「頭おろさん」だけ。当然出家して僧になるという意味。出家を表す類義語には、「飾りおろす」「落飾す」「御髪おろす」「さまかふ(様変ふ)」「かたちかふ」「世を背く」などがある。このついでにまとめておくといいだろう。

ウについて。「いくらも」は副詞「いくら」に係助詞「も」がついた連語で、「いくらでも、いくつでも」の意。ただし下に打ち消

しの表現がくると「いと」「いとも」などと同様に陳述の副詞として「それほどには、たいして」という意になるので注意。ここでは前者の意。「差図」でひっかつたかもしれないが、すぐ下が「家作るべきあらましをす（家を建てるつもりで空想する）」となっているので、単なる「図面」よりは、「見取り図」「設計図」ぐらいで訳したい。

(二) 「いみじきこと」がここではどのような意味を持つかというのがポイント。「いみじ」は程度が甚だしいことを表現する形容詞であるが、良い意味にも悪い意味にも使われる。傍線部のすぐ後で「まことに、あるまじきことを企みたるは、はかなけれど」と、作者も一度はこの男に対して否定的な言辞を述べており、ここまでは一般の人々の見方に一致する意見を譲歩的に示した部分だと考えられるので、ここでの「いみじき」はネガティブな意味でとることになる。「つまらない」だと漠然としすぎているので、「無駄な」「役に立たない」など、明確に内容を説明する言葉を補うこと。「ためし」は「例」のこと。これは知らないと思うようなない。

(三) 「よしなきこと」は、「つまらないこと」でいいだろう。「かく」が何を受けているのかを考えれば、つまらないこととは簡単に言うとか家を持つこと、特に豪華な家を持つことであるとわかるだろう。では何故豪華な家を持つことがつまらないことなのか。この理由は二つある。傍線部オの前の部分が一つで、もう一つは後に述べられている部分である。特に重要なのは、「我が身の起き臥す所は一二間に過ぎず」（8～9行目）と「主の命あだなれば、住むこと久しからず」（12行目）の部分である。結局、「我が身」「主」といった住む人に比しての、前者は空間的な無駄、後者は時間的な空虚さを述べていることがわかる。

(四) 「あらまし」はもともとラ変動詞「あり」に《推量》の助動詞「まし」の接続した形が語源で、「まし」が《推量》の中に《実現不可能な願望》のニュアンスまでも含むことから、「あつてほしい」「望ましい」「理想的だ」と訳せる。結局理想上の家だということがわかる。従って、実際の家を求める時の苦労や家を持った後の手間が一切なく、また家を失うという心配もないということ。現代語訳の問題ではないので、「家」の性質を説明すべきである。解答欄の大きさとも相談してうまくまとめてみてほしい。

現代語訳

（あるところに、）親が、たいそう大事にして育てている、貴族の娘がいた。（和歌・書・管絃といった）女性としての嗜みはすべて身につけてしまつて（いたので、）（親が）今度は「漢籍を読ませよう」ということで、「指導者には親しいような人をつけよう」と思つて、（娘とは）母親が違ふ子で、大学の学生であつた（男を選んだのだが、）（娘と男とは）腹違いだったので、（それまでは）疎遠で、（娘は）「会わない（＝恥ずかしいから気が進みません）」などと言つたけれども、（親は）「まったく縁のない」知らない人よりは（いいだろう）」と言つて、（男とは）簾ごしに、（さらに目隠しの）几帳を立てて、（娘に漢籍を）習わせた。この男は、（几帳ごしに垣間見える娘の）たいへん魅力ある様子を見て（好ましく思い、）（また娘も）少し（ずつ）慣れていくうちに、几帳の間から顔を見せ世間話などとして、（次第に親しくなつていったが、あるとき男が）漢籍を読むための点図というものを渡したのを、（娘が）見ると、（そこに）角筆で、歌一首が書いてあつた。

なかにゆく……（妹山と背山の）間を（流れて）ゆく吉野川は、なんとか浅くなつてほしい。妹背の山を越えて見る（＝障害を乗り越えてあなたと愛しあう）ことができるように。

とあつたので、（それを見た娘は）「（お兄さまは）こんな（気持ちを持つて）いたのか」と（それ以上に男が言い寄ってくるのを恐れて）氣遣いをしたけれども、娘は「（血のつながつた兄に対してあんまり）つれなくできるだろうか（、それもよくない）」と思つて、

妹背山……（恋人同士にたとえられる）妹背山は影さえ映らないようになってしまふほど、吉野川の水は濁つてほしいと思います。（と返歌だけはした。）このように言い交わしているうちに、相手を愛しく思うようになるのが世の常だから、（初めは頑なだった娘の）気持ちもほぐれて、しばらくすると二人の間は）それほど疎遠な間柄でもなかった。

（ひととおりの習いごとを終えた娘に）よくあるように漢籍を読ませているのには、（実は）「内侍にしよう」という心算もあつて、親は（娘に）漢籍を教え（させ）るのだった。（したがつて親は娘に対して男と）手紙を交わすことには難色を示したのだが、（一方で）この（腹違いの）兄は心を乱して、（妹でもある娘のことが）思い出されてしかたがなかった。男が（娘に）言うことは、「このように（あなたのことが）しきりに思い出され、（私の）このうえない愛情をわかつてくれずに、他の（男の）人を恋慕ったりなさるなんて、

(あまりに) 冷淡な仕打ちですよ。

目に近く…… (私の気持ちが通じないならいつもあなたを) 間近に見ている甲斐もないとたとえ思ったところで、(あなたが) 心を他 (の男性) に向けるなら、(やはり) 恨めしいのです」

と言ったところ、「そんなふうにおっしゃるなんて、私のほうこそ」お兄さまのお気持ちがわかりませんわ。

あはれとは……そんなにつれなく見えるとしたら、(それはきっと、他の人に知られてはいけないと思うほどに) あなただけをひたすらお慕いしているからなのでしょう。(こちらこそ) やるせない気持ち (でいるのだ) とわかってください。

(私の気持ちをわかってほしいなんて、お兄さまったら) ほんとにのんきな方ね」言ったので、(男は) 少し気をよくして、いとどしく……あなたの (私への) 嘆きがいよいよ激しくなるから、(それに呼応してあなたへの私の) どうにもならない思いも、いつそう燃え盛っていたのだなあ。

このように言い交わして、(二人の) 気持ちは通じ (るようになつ) たけれども、親にも隠し、(まわりの) 人にも遠慮があったので、うちとけて長い間話し込むわけにもいかなかった。

解答

(一) ア＝教師としては親しいような人をつけよう。

イ＝二人の間を流れる吉野川はきつと浅くなつてほしい。

エ＝二人の間柄はそれほど疎遠でもなかった。

キ＝あなたへの胸の晴れない恋の思いもますます強くなることだ。

(二) 女は腹違いの兄である男が自分に恋心を抱いている事を悟って、男があまり近づいてこないように警戒したということ。

(三) 腹違いとはいえ兄妹間の恋愛は、娘を内侍にすることの妨げになると考えて、女の親が女に男との文通をたしなめた。

(四) 私たちの恋が人に知られないよう冷淡にふるまう私の苦心がわからないとは、あなたの気持ちこそ私にはわかりません。

(一) ア 逐語訳すると「指導者には親しいような人をしよう」となる。「むつまじからん」の「ん」は助動詞「む」だが、ここは文中用法で次に体言がきているので《婉曲》で理解して、「ような」と訳す。また、文末の「ん」だが、こちらは文末用法でありかつ主語が一人称なので《意志》でとる（ただし、主語が一人称ならいつでも《意志》になるわけではない。あくまでも文脈で判断すること）。このように逐語訳をしたうえで、省略文節や指示語などの処理をすべきところがないか探す。ここでは、最後の「しよう」に処理が必要。文脈に即して、「つけよう」などと具体的な内容を明らかにする。

イ 逐語訳する際のポイントは、最後の「なん」。ここは《完了》の助動詞「ぬ」の未然形についているので、《詠え（＝他者に対する願望）》の終助詞の「なん」と判定できる。したがって、これを「～してほしい」と訳しつつ、傍線部を逐語訳すると「間を行く吉野川はきっと浅くなつてほしい」となる。なお、この場合の助動詞「ぬ」は《強意》に近い用法。動作が確実に完了するという気持ちだが、「浅くなる」という動作が確実に行われることを願う気持ちに繋がる。逐語訳の次は、「間」に説明を施す。このままでは何の間か分からないので、はっきりと「二人の」に類する言葉を補う必要がある。ちなみに、恋人同士の間を山や川が隔てて邪魔をするという発想の恋歌は多い。覚えておくと役に立つこともある。

エ 逐語訳のポイントは「いとく〜なかり」「いと」は《打消》の語と呼応して、「それほどく〜ない」の意を表す。案外気づきにくいのだが、形容詞の「なし」も呼応対象である。見落とさないようにしよう。逐語訳は、「それほど疎遠でなかった」となる。次は、省略文節の補い。ここでは主語が省かれているので、「二人の間柄は」を補う。

キ 逐語訳は簡単にできるだろう。「晴れない思いもますます燃えさかるのだなあ」となる。言うまでもないことだが、「思ひ」の「ひ」に「火」をかけるのは古典和歌の常套手段。ここではさらに、上の句の「嘆き」「こがるれば」に「木」「焦がる」が響いており、「木が焦げるとそれに対応して火が燃える」という自然現象に「あなたの嘆きが激しくなるとそれに対応して私の思いも激しくなる」という心情叙述が重ねあわされている。このように、自然物象と心象叙述を重ね合わせることで、より鮮明な詩的イメージをかたちづくるというのも古典和歌、とくに平安以前の和歌にはしばしば見られる現象である。このようなことも踏まえつつ、「やらぬ思ひ」を具体的に説明しておくことが必要であろう。

なお、「やらぬ思ひ」を「晴れない思い」と訳せることについて。「やる（＝遣る）」を《他動詞》と見たとき、これに対応する《自動詞》に「行く」を挙げることができる。現代語の「心ゆくまで」が「満足するまで・存分に」といった意味合いになる

ことから、古語「心(を)やる」(＝「心ヲ行カセル」)も「満足する・気を晴らす」といった意味で用いられることがわかるだろう。したがって、古語の体言「心やり」は現代語の「気配り・思いやり」の意味にも用いられるが、むしろ「気晴らし・慰み」の用法のほうが一般的である、ということも一緒に憶えておくといよい。

(二) 説明すべきポイントとは二点。「かかりける」という指示内容の明示と「心づかひ」の具体的説明である。

まず「かかりける」の方だが、これが「なかにゆく」という男の歌に対する感想であることを押さえる。この歌は結局、二人の間を隔てているすだれや几帳を越えてあなたに会いたいという恋心を訴えたものである。それまでは、異腹の兄として付き合ってきたのだから、女は、この歌を見て初めて男の秘めた恋心に気づいたのである。この点が明らかになっていることがポイントである。

次に「心づかひ」の方だが、右に述べた「かかりける」という驚きから自然に導かれる警戒であり、また次の「なさけなくやは」と思つて返歌することと逆接でつながる内容であることから絞っていく。女の内面に即して考えれば、異腹の兄である男から懸想をしかけられ戸惑う思いとつれない態度をとってはまずかうという理性とが同居している状態である。とすれば、この「心づかひ」はその戸惑いからくる警戒心であり、男に返歌していくことは反対に、男を近づけまいとする内容だとわかる。この点を明示することがポイントである。

(三) 「なぜ」という理由の方から考えていこう。ここは傍線部の直前に「だから」を挿入して意味が通るので、ここが理由である。つまり、親は娘を内侍にしようという心積もりがあったから、というのが理由説明のポイントとなる。とすれば、「文通はしには言ひたれど」の具体的内容もわかるだろう。親が娘と男の文通に文句を言ったということである。続く歌の贈答から、女の(表面上)冷淡な対応がうかがえるので、「人物関係」については、娘の親が女に向かって言ったのだと判定できる。つまり、親から文通をたしなめられたので女は男の手紙に積極的に対応することができなくなり、それが男に「私以外に好きな男がいるのか」との思いを抱かせたという展開である。以上の三点を明確にして答案とする。

(四) 傍線部の「人の御心も知らずや」を逐語訳すると、「だれかさんのお気持ちもわからないわ」となる。ただし、一般には「人」は第三者を指す言葉だが、恋歌的文脈では「あなた」の意になることも多い。ここもその場合である。と、ここまでは問題なくできる

だろう。難しいのは、ここに込められた女の気持ちを正しく把握することである。

一般に、男女間の恋の贈答歌は、男が懸想の歌を詠みかけるのに対して、女はどこかしらその懸想に反撥してみせるというパターンが多い。この場合もその一般的な贈答歌の形式に沿っており、女の冷淡な対応に男が「私の激しい恋心も知らずに、私以外のほかの男性にあなたが心を向けるなら、それはとても恨めしい」と自分の苦しい胸のうちを素直に訴えかけるのに対して、女の方は「私が冷淡に見えるのはあなたを愛する気持ちが他人にバレないように。私の気持ちをこそわかってほしい」と切り返すのである。

したがって、女の気持ちを説明する際のポイントは、「私がこんなに苦しんでいるのに、どうしてわかってくれないの？」という方向で書くことである。

ここで、「知らずや」の解釈に注意が必要である。この形の「や」には、《疑問の係助詞の終助詞的用法》（または《疑問の終助詞》）の場合と《詠嘆・呼びかけ・念押しの間投助詞》の場合とが考えられる。いずれにせよ「知らずや」の《客語（＝直接目的語）》は直前の「人の御心」となる。これは「御心」と尊敬の接頭辞を伴うことから、「人」が「わたくし自身」を意味することはない（この解説のはじめの段落を参照のこと）。さて、右を踏まえた上で「知らずや」を解釈することになる。前者《疑問》では「あなたは御存じないのですか」となるが、右に見たとおり「あなたには私の気持ちがわからないのですか」とは解釈できないから、これでは「あなたはあなたのお気持ちを御存じないのですか」となって、次の歌の詞書きとして意味が通らない。したがって後者《詠嘆・呼びかけ・念押し》の立場に立つて、「私にはあなたのお気持ちがわかりませんわ」と解釈することになる。



会員番号	
------	--

氏 名	
-----	--